

医療ルネサンス

No.5781



股関節脱臼

2

5

「過去の病気」誤った認識

先天性股関節脱臼の治療は、1歳過ぎまで診断が遅れると、赤ちゃんの時に見つかる場合に比べ格段に難しくなる。股関節が外れたまま成長が進むので、年を重ねるほど骨がはまりにくくなってしまふ。

「診断された時はもう4歳になっていて、手術が必要でした。治療には、丸半年かかりました」

愛知県蟹江町の梨本裕美子さん(44)は、我が子の闘病体験を振り返る。長女の果菜流ちゃん(7)が右の股関節脱臼と診断されたのは2011年4月のことだった。

「1歳の時の映像を見ても、今なら歩き方がおかしいのがわかる。でも、健診で異常ないと言われていたし、当時は気づきませんでした」と梨本さん。ただ、成長とともに心配になってきた。右脚がやや下がる歩



き方、右脚でケンケンがでないこと、右脚が左より細いこと。気になることがいくつもあった。

「歩き方がおかしいんですが、大丈夫でしょうか」。3歳児健診の時、診察した小児科医に相談した。「走れますか?」と尋ねられたので、「足は速いんです」と答えると、「それなら大丈夫でしょう」と言われて終わった。その後、知人のついでで受診した整形外科で、ようやく診断がついた。

「できるだけ早く手術したほうがいい。主治医となった、あいち小児保健医療総合センター(同県大府市)の服部義さんは、即入院を求めた。」

半年以上の治療生活を経て、今では縄跳びも上手になった果菜流ちゃん

横になって脚を重りで引く張るもので、脱臼している骨を無理なく戻せるよう、あらかじめ筋肉や神経を伸ばしておくための処置だ。

手術では、大腿骨の位置を治すと同時に、それをはめ込む骨盤のくぼみ(臼蓋)を切って形を整えた。長期間脱臼したままだったので、臼蓋の発育が悪くて大腿骨がうまくはまりきらず、大人になってから、強い痛みや症状がある「変形性股関節症」になる恐れがあったためだ。

現在、半年に1度通院して経過観察を続け、順調に回復している果菜流ちゃんは「右脚でケンケンできるし、縄跳びも得意」と、活発さを取り戻した。

服部さんは「3歳以上で診断されるとほとんど手術になるが、生後3か月くらいでわかっている場合は通院で治療でき、手術しなくて済んだ可能性が高い。『過去の病気』という風潮を改め、早期発見を徹底しなければいけない」と話す。